本編57P セリフなし差分含め107P

放課後部活中の彼女の制服を着て用務員のおじさんにメスイキさせられたぼく

ぼく

彼女

『生徒会長とキミの事で人に聞かれるとマズい話がある』
その理由で用務員さんに呼び出された時点で僕は嫌な予感がしていた…
「わざわざ用務員室に呼び出して話って何ですか？」
「あぁちょっとキミに見て欲しいものがあってね。」

「これなんだけど…キミと生徒会長で間違いないよね？」
「こ、これをどこでっ？」
『驚きはしたが正直会長と僕の秘密はこれしかないと薄々感じていたので
やっぱりかという気持ちの方が強い』
「いやぁ用務員の仕事柄校内の色んな場所に隠しカメラを仕掛けるチャンスがあってねw」

「くっ…盗撮なんて最低ですね…
たしかに生徒会長と会計の僕が付き合ってるのが公になると話題性はありますが…
でも、キスの写真が流出するよりもアナタが盗撮した事の方が遥かに大問題になりますよ!!」
「へぇキミは俺の盗撮を学校に告げ口するつもりなのか?」
「は?当たり前じゃないですか!!僕達はキスしかしてないしアナタの行為は犯罪ですよ
何が目的か知りませんがこんな盗撮写真を僕に見せたのは失敗でしたね」
「失敗…?ふーんそうかねぇ…?もう一枚見てもらいたい画像があるんだが」

「こっこれは？トイレ…!?
会長…？」
「言っただろ？用務員は深夜の見回り中に女子トイレに盗撮カメラを仕掛けるぐらい
簡単に出来るんだぜｗ」
「まぁまさか生徒会長様のオナニーが撮れてるとはさすがに思わなかったがなぁｗｗｗ」
「お、おなにーなんて…そんな…会長が…まさか…」

「お前なぁ別にここはお坊ちゃまお嬢さまが集まる訳でもない普通の高校だぞ？」

「今時せっかく恋人ができたのにキスまでなんて生殺しもいいトコだろ」

「僕だって興味がないわけじゃなくて…水泳部と生徒会で会長が忙しそうだから…せめて部活を引退するまではと…」

「お前の考えは立派かもしれんが2年年上の会長様はもっと先に進みたかったようだな」

「そん…な…？いやちょっと待ってください…何でこれを会長ではなく僕に…？」

「おっさすが1年生で早くも生徒会入りしている優等生はいい所に気が付くなw」

「言いたくはないですがアナタのようなゲスな男ならこれをネタに会長を脅迫して体を…」

「まぁどんなに頭がキレても彼女とキスしかしないような童貞高校生には俺の考えが解る訳ないよなぁw」

「…？どういう意味ですか…？」

「答えは簡単さ。俺が脅迫して体を奪いたいのはお前なんだよw」

「はぁっ!?何の冗談ですか!?僕は男ですよ??」
「まぁ世の中にはこういう性癖の人間もいるって事だ。なによりお前はその辺の女子よりも可愛い顔をしているしな」

「そんな…」
「逆に考えてみろ。お前次第で会長は何も知らず普通の学園生活を送れるって事だ。当然お前が俺の言う事を聞くならだがな。意味は解るな?」
「僕がアナタの言う事を聞かないとこれをばら撒く…と…?」
「いやぁ優等生は話の理解が早くて助かるなぁｗｗｗ」

「何をすればいいんですか…？」
「とりあえずお前は会長のこのデータを消したいだろ？
明日の４限目の授業をサボって俺が指定した場所に来い。」
「授業をサボるなんて無理ですよ…」
「おいおい俺は優等生は好きでもつまらない駆け引きは嫌いだぞ。
立場を考えろ。いいか？俺の命令に躊躇した時点でデータをばら撒く。解ったな？」
「くっ…わ、解りましたよ…」
「じゃあ明日楽しみにしてるぞｗｗｗ」

僕は何の解決策も見出せず昨日は一睡も出来なかった。
ホントに体調が悪くて保健室で休みたい所だが
用務員の命令に従い４限目をサボった…
そして指定されてやって来たのがこの女子更衣室だ…
「女子更衣室に呼び出すなんてどういうつもりですかっ!?」
「お前がちゃんと命令を聞くか試す為に無茶振りしただけで意味はないんだｗ」
「くっ…ふざけないでください…僕が逆らえないのは解ってるでしょ…」

「なんてなwちゃんと意味はあるさ。
今水泳の授業を受けているのは誰だと思う？」
「そんなの知りませんよ…ま、まさか…？」
「まぁ当然そのまさかの会長様だわなwww」
「な、何をさせるつもりですか…？」
「お前等価交換って知ってるか？
会長のオナニー映像を消すなら何をすべきか解るな？」
「ぼ、僕にここで…お…おなにーをしろ…と…？」

「惜しいなぁ…半分正解!!
でもそれなら昨日用務員室でも出来た事だろ?」
「ここでしかできない事…?」
「やはりこういう発想力は弱いなw
ほれ、そのロッカーに会長様がお脱ぎになった制服があるじゃろ?」
「はぁっ!?何を言ってるんですか?」
「おい!!昨日の今日でもう忘れたか?
お前が会長を守りたいなら躊躇する事すら許されないんだよ」
「さっさと脱げ!!次はないぞ」

「こっ…こんな事…絶対許されないですよ…」
「許されないってじゃあどうするんだ？」
「お前が何かをしたら俺は必ず会長のオナニー動画をネットに流すからな
いいか？捕まろうがどうなろうがこれは絶対だ!!」
「い、いいんですか？あなたの人生も終わってしまいますよ？」
「おぉ好きにしろよｗｗｗ」

「強がりはやめてください…捕まるんですよ？」
「18歳の将来明るい生徒会長と48歳バツイチ用務員の人生が終わるダメージが同じとは思えんがなw」
「解っただろ？これが無敵の人ってヤツだw」
「お前が会長を守る為には俺の言う事を聞いてご機嫌を取るしかないんだよw」

「あなたが撮りたいのは僕のオナニーなんですよね…？
なんで会長の制服を着ないといけないんですか…」
「お前は会長の動画さえ消させたら自分を犠牲にしてでも
俺を警察に突き出す可能性があるからな」
「会長の彼氏が女装癖のド変態ぐらいインパクトがないと
会長のオナニー動画とは釣り合いが取れないだろｗｗｗ」

「…それにしても…見れば見るほど男なのが信じられないな
後ろ姿だとホントに女にしか見えんぞ」
「お、男に決まってるじゃないですか…
そんなにジロジロ見ないでください…」
「着替えぐらいで何言ってんだw
お前この後自分が何をしないといけないか解ってるだろw」

「おぉやっぱり制服が似合うなw
その辺の女子より可愛いぞwww」
「う、うるさいですよ…
そんな事言われて喜ぶとでも…？」
「そうか？まぁお前がどう変わるか楽しみにしてるよ」

「何なんですかアナタは…
男が好きとか言いながら女装させて意味が解りませんよ…」
「何だお前今時男の娘ぐらい知ってるだろ？
まぁ男に女の格好をさせる良さを童貞に解らないのは仕方ないかｗｗｗ」
「とりあえず最悪な相手に弱みを握られた事は解りましたよ…」

「おいおいおいｗｗｗ
お前あんな事言っててなんで女装しただけで勃ってんだｗｗｗ」
「こ、これは…違うっ…制服が…温かくて…
さっきまで会長が着ていたと思うと…」
「何も違わないだろｗｗｗ
お前は女子更衣室で彼女の脱ぎたて制服を着て勃起する変態なんだよｗｗｗ」
「うるさいっ…そんなのじゃないって言ってるじゃないですかっ!!」

「はいはい解った解ったw
もういいから早くオナニーしろよ授業終わって女子が戻って来るぞwww」
「…わ、解ってますよ…
その代わり…絶対に会長のデータは消してもらいますよ!!」
「まぁこんな汚い大人の言う事信用できないだろうが約束は守るとしか言えんな。
お前が素直なうちは俺も無茶な事はしないさw」
「はぁ…はぁ…やりますよ…やればいいんでしょ…はぁ…はぁ…」

「なんだよお前泣いてるのかｗｗｗ」
「うるさい…うるさい…」
「セーラー服姿で泣きながらオナニーする男の娘なんて…
…最高じゃないかこんなの普通見れないぞｗｗｗ」
「うぅぅ…ホントに最低な人間ですねっ!!」
シコ
シコ

「もう動画を撮ったんだからいいですよね？」
「いやぁ俺もそのつもりだったんだけど…お前ずっと勃起してるな？
やっぱりこんな状況で興奮するドMなんじゃないのか？」
「そのまま射精するまで続けろよド変態ちゃんｗｗｗ」
「ち、違う変態なんかじゃない…違…う…
あ、あぁ…で、出るぅっ…」
シコ
シコ

「おいおいおいおい凄い量だなwいつもこんなに出るのか？」
「し、知りませんよ…オナニーなんて…めったにしないんですから…」
「若いんだから定期的に抜いとけよwだからこんなに出るんだぞwww」
「まぁ飛び過ぎたおかげでニーハイが汚れなくて済んで良かったなwww」
「うぅ…もう…いいでしょ…早く着替えさせてくださいよ…」
ふぴゅる～
ふぴゅる～
ふぴゅる～

「いやぁこんなの見てたら我慢出来る訳ないぞw」
「うぅっ…ぐっ…」
「あああぁ…あったかいなぁぁw
クチマンコは女も男も変わらんからつまらんが
時間もないしさっさと出させてもらうぞ」

「ぐっ…ちょ…ちょっと…待っ…喉…苦し…い」
「その苦しんでる顔…お前俺を喜ばせる天才だなっｗｗｗ」
ぐぼっ
ぐぼっ
ぐぼっ
「無…理…息が…出来ない…死んじゃうっ…」
「大丈夫大丈夫これぐらいじゃ死なないからっｗｗｗ」

「ほら力を抜いて喉を開けっ!!
亀頭で口の上側擦れたらゾクゾクして気持ちいいだろ?」
(な、何を言ってるんだこの人は…こんなの苦しいだけで…ホントに…死ぬ…)
「まぁそのうち喉マンコだけでイケるようにしてやるw
よしっ!!出すぞっ!!喉奥で受け止めろっ!!」
ビュッ
ビュッ

「おい尻をこっちに向けろ」
「はっ？待ってください…あんな大きいのお尻に…」
「何言ってるんだお前いきなりケツにチンコ入れるわけないだろｗｗｗ
無知なのかと思ったらアナルセックスは知ってるんだなｗｗｗ」
「し、知りませんよそんな事…」
「まぁいいさ。お前の期待と違って入れるのはこれだけどなｗ」

「何を入れたんですかっ!?ざ、座薬…?」
「まぁ薬は薬でも媚薬だけどなｗｗｗ」
「媚薬っ!?嘘でしょっ…
この後も授業があるのに何考えてるんですかっ!?」
「おいおい媚薬だけで終わりと思ってないか?」
「はっ?まだ何かするつもりですか!?」

「い、痛っ…」
「ローターサイズはちょっと大きかったか？」
「ローターっ!?」
「まぁでもこれぐらいなら初めてでも入るから力を抜け」
「力を抜けって言われても…どうしたらいいか解りませんよっ…」
「キツイのは入れる時だけで入ってしまえば楽なもんさ
ちょっと強引に押し込むぞ！」

「うぅ…お尻の異物感が…」
「出てこないようにしっかりケツ穴締めて授業受けろよw」
「他人事だと思って…簡単に言ってくれますね…」
「まぁドMの変態でもない限りお尻にローター入れたぐらい数時間は耐えられるだろ」
（あと3時間ぐらいか…？こんなの我慢できるのか…な…？）

「こういう妨害がなければだけどなｗｗｗ」
「んんっ…!?あぁぁっ…」
「どうだ？ローターが前立腺に当たって凄い刺激だろ？」
「ぜ、前立腺…？」
「男のケツ穴にはな。ちんこよりも凄い快楽が得られるスイッチがあるんだよ」
「あ…あぁ…と、止めて…ください…こんな状態で…授業なんて…」
ぴん
ぴんぴんぴんぴん
ぴんっ
ピッ

「安心しろさすがにこんな振動音がしたら周りにバレるからなw」
「で、ですよね…早く抜いてくださいよ…」
「抜くわけないだろ。振動を最弱にすると…
どうだ?これなら音も漏れないし刺激もたいした事ないだろ?」
「刺激はないけどお尻に入ってる異物感が凄いんですよ…」
「まぁすぐに慣れるさ。解ってると思うが放課後まで絶対に抜くなよ」

（…あぁ…弱い振動がジワジワずっと続くのが…
こんなにツライなんて…）
（ローターのせいなのか媚薬のせいなのか解らないけど…
…お尻が…気持ち…いいなんて…）

（あぁ結局お尻が気になってお昼も食べられなかった…）
（ゾクゾクする感覚が大きくなって…ヤバイけど…この50分さえ耐えれば今日の授業は終わり…）
（でも…放課後またあの用務員に…僕の体はどうなってしまうんだ…）
ぞく
ぞく
びく

ローターの刺激に何とか耐え、
放課後呼び出された用務員室で
僕は再び最低な用務員と対峙したが
正直僕の心はもう折れかかっていた…
「放課後までちゃんと入れたまま過ごしたんですから早く抜いてください…」
「あぁ解ってるよちゃんと抜いてやるが…その前にこれに着替えろよ」
「セーラー服っ!?何であなたがこれをっ!?」

「会長達が着替えて出て行く隙をついてせっかく持って来たんだから早くスカートたくし上げて見せてみろ」

「……うぅ…嫌ですよ…恥ずかしい…」

「また同じ事言わせるのか？さっさとやれ」

「だから何でお前は女装しただけで勃起するんだよｗｗｗ」

「…これは…あなたが変な薬をお尻に入れたせいで…」

「ははは w 媚薬のおかげで言い訳できてよかったなｗｗｗ」
「ホントに媚薬のせいなんです…ずっと体がおかしくて…
この微妙な振動がツライんですよ…」
「ほぉいい感じに効いてきたみたいだなｗ
よしケツをこっちに向けろ抜いてやるから」
「……うぅ…わかりました…」

「抜きやすいようにちゃんと自分の手で尻肉を拡げろよw」
「…こ、これでいいでしょ…？早く…抜いてください…」
「いやぁいい格好だなぁwww
もう時間を気にしなくていいんだからじっくり楽しませろw」
「くっ…逆らえないからって…」
ぐ
ぐぃ

「あぁ!?なんだ反抗的だなぁ…」
「っ!?んんんんっ…!?(振動が…強くっ!?)」
あぁ、
「ずっと弱振動で焦らされてたから
この前立腺への刺激が堪らないだろ?ｗｗｗ」
(これ…ヤバい…ヤバいヤバい…ヤバい…)
ビッ

「ほら抜いてやるから感じてないでケツ穴拡げろよw」
「か、感じてるなんてバカな事言わないでくださいっ!!」
「お前は知らんだろうが酒を直腸摂取すると命の危険があるぐらいでな、媚薬を直腸から摂取した上に3時間もローターの微振動で焦らされたらケツマンコの感度が高まってるのは当たり前なんだよw」
ゾゾゾ
くぃ
くぃ

「よしいい感じにほぐれてるな。
引き抜くから出て行く時の快感をよく覚えるんだぞっ!!」
（あぁ…自分の意思じゃなくウンチを無理やり引っ張り出されてるみたいな…）
（なんだこれ…初めての感覚…あぁ…出る…出されちゃうっ…）
「おっ出てきたぞ。腸汁が糸を引いて美味しそうなケツマンコに仕上がったな」
ぬ…ぽんっ
ぐいっ

「な、なんの真似ですか…これは…？」
「いやぁ今からお前のケツマンコに入る物をよぉく見せとこうと思ってなw
しっかり臭いも嗅いどけよｗｗｗ」
（あぁ…何でオチンチンの臭いを嗅いだだけで…
こんなにドキドキするなんて…）
「もうチンコの臭い嗅いだだけで発情してるじゃないかｗｗｗ」

「何だ我慢できないのか？自分から舐めるなんて…」
（ダメなのに…この匂いを嗅いだら…頭が働かない…）
（こんなのおかしい…絶対おかしい…
でも…さっきからお尻のムズムズが…）
「じゃあ咥えろ。ちゃんとヨダレで滑りを良くしないと痛いぞw」

（あぁ…何で…おチンチンを咥えて興奮してる…？）
（悔しい…でも…口の上に擦れて気持ちいい感覚が解っちゃった…
もっと…もっと擦り付けたい…）

（気持ちいぃ…気持ちいぃ…息苦しくて…
頭がぼーっとするのも気持ちいい…）
がぽ♡
がぽ♡
「おいおい激しく咥え過ぎじゃねーかｗ
そんなにされたら出ちまうだろっｗｗｗ」

「じゃあそろそろ入れるぞ？覚悟は決まったか？」
「僕の覚悟なんて関係なく入れるんでしょっ!?」
「解ってるじゃないかwもう少し抵抗してくれてもおもしろかったんだがなwww」

「あぁぁっ!!お、お腹…苦しい…」
「苦しいか?でも考えてみろ。こんなぶっといのがすんなり入ってるぞw」
「そ、それは…」
「痛くはないだろ?すぐに慣れるから力を抜け」
ぐぐぐ

『ちょ…動かないで…ダメ…』
「ホントにダメなのか？敏感になってる前立腺をゴリゴリ擦られると気持ち良くないか？」
『き、気持ち良くなんか…ない…ですよ…』
「へぇいつまでそんな態度が取れるかな？」

「どうだ？俺のチンポで前立腺をじっくり圧し潰されてる感覚が解るか？」
「な、なんで…オチンチンに触ってないのに…」
トロ～…
「そこをグリグリされると…で、出そう…ダメ…止めて…出ちゃいますぅっ…」

「どうだ？我慢出来なかっただろ？
自分の意思に関係なく押し出されるからこれはトコロテン射精と呼ばれてるんだぞw」
「と、ところてん…？」
「そうだ。そして…
トコロテン射精の凄い所はなぁ…」
トポ

「金玉にザーメンが残ってる限り強制的に射精させられるんだw」
「あ、あぁぁぁ…と、止まらな…い…」
「このまま空っぽになるまで押し出してやるよ!!」
ドロッ

「おいおいそんなに畳を汚すなよw掃除が大変なんだぞwww」
「うぅ…もう…無理ぃ…出ない…もう…出ないです…許してくださ…い…」
「もう空になったのか？若いのに情けない男だなw」

（これ…さっきより奥まで入って…ヤバい…）
「どうだ？奥まで入って今までよりも快感がデカいだろ？」
「な、何ですかこれはっ!?
頭がチカチカして…何も考えられなくて…怖いんです…」
「いいから何も考えず力を抜いて快楽を受け入れろっ!!」
「おらっ!!ケツマンコをおっさんのチンポで突きあげられてイケっ!!」

「イクイクイク…イクっぅぅぅ…」
「あぁ…もうイッても出なくなったの…に…
イクのは止まらな…い…なんて…」
「お前は知らないだろうがな。それは今までのイクとは全然違うぞ。」
「今お前はちんこでイッたんじゃない。前立腺と脳だけでメスイキしたんだ!!」

「イッたからぁ…もうイッたから動かないでくださいっ!!」
「自分ばっかり気持ち良くなってんじゃねーよｗｗｗ」
「俺もイクからメスイキしながらケツマンコでザーメン受け止めろっ!!」
「お尻に…出すなん…て…嘘…でしょっ…!?」

「あ、熱いのっ…出されながらぁっ…イクゥッ…!!」
「うっ…メスイキさせながらのケツマンコ中出しはやっぱり最高だなっ!!」
「初日からこんな事でお前大丈夫か？これから楽しい毎日になりそうだなｗｗｗ」
「こんなの毎日続けられたら…ボク…壊れ…ちゃ…う…」
どぷっ
どぷっ
ビクッ
ビクッ

（制服を用務員室に取りに来いなんて指示…
どうせまた今日もイヤラしい事をさせられると思ってたのに…）
（なんでこんな事に…？
私さえ言う事を聞けばキスの画像は消す約束だったはずじゃ…）

（彼を守る為に毎日屈辱に耐えて来たのに…
彼が私の制服を着て…犯されてる…？どういう状況なの…？
意味が解らない…もう何も考えたくないよ…）
つづく…？

G+

IG+

IG+

つづく…？